

タイトル：北朝鮮による日本人拉致
副題：日米連携で機会の窓を開く

【写真1（オンライン記事のみ）】

高市総理は拉致被害者御家族等と面会した（2025年10月）。

○「47年毎日怖い」

・これは、2025年8月、日本のある中学生が、1977年に13歳で北朝鮮の職員により拉致された横田めぐみさんの弟である拓也さんから拉致問題について聞き、めぐみさんの心情を想像して作った啓発キャッチコピーだ。拓也さんは、家族の怒りや苦悩、そして「姉が帰国したら、自分が最初に姉に言うとしたら、「おかえり」でなく「ごめんなさい」の言葉だと思う。」との思いを語る。

・北朝鮮では、めぐみさんの他、今も多くの人たちが明日をも知れぬ思いで助けを待ち、故郷の御家族は愛する人のいない朝を日本で迎える。

・文字どおり、北朝鮮による日本人拉致は、50年近く毎日続く現在進行形の深刻な人権侵害である。

○日米の連携

・拉致問題は日本政府の最重要課題。日本政府は、昨年3月にも Washington Post に意見広告を掲載したが、まだ厳しい状況は変わっていない。

・昨年10月に高市総理が就任。直後に拉致被害者御家族と面会、翌週訪日したトランプ大統領との首脳会談に臨んだ。大統領は、拉致問題解決に向けた全面的な支持を表明した。

【写真2】

北朝鮮による拉致被害者御家族とトランプ大統領の面会（2025年10月）。トランプ大統領と拉致被害者御家族が面会するのは3回目。

・また、トランプ大統領は拉致被害者御家族と三度目となる面会を実施し、「できる限りのすべてのことを行う」と述べた。御家族は、過去の米朝首脳会談で拉致問題を取り上げたことのある大統領の力強い言葉に勇気付けられた。米国議会では、昨年、北朝鮮に拉致された日本人のための正義を求める決議案が上下院で提出されている。

・日本政府及び国民は、長年にわたる、米国政府及び国民の、党派を問わない支持に感謝している。一刻も早い問題解決に向け、日本は米国と緊密に協力していく。

○拉致問題の解決は国際社会にとっても利益

・もちろん、日本人の拉致被害者の帰国を実現することは、日本政府の責務。北朝鮮に関する日本政府の方針は、2002年の日朝平壤宣言に基づき、拉致、核、ミサイルといった諸懸案を包括的に解決し、不幸な過去を清算して、日朝国交正常化を実現する、というもの。

・とりわけ、拉致被害者やその御家族も御高齢となる中で、人命そのものがかかった人道問題である拉致問題を一刻も早く解決することは、日朝双方が共に平和と繁栄を享受する未来を描くためにも不可欠であり、国際社会にとっても利益となるもの。

・日本政府は、様々な状況に応じて果敢に行動する。高市総理は、金正恩委員長と正面から向き合う決意を述べている。拉致問題担当大臣を兼任する木原官房長官は「私が最後の拉致問題担当大臣になるとの覚悟を持って、全力で取り組む」と繰り返し述べている。

・日本政府は、すべての拉致被害者の一日も早い御帰国の実現のため、米国や国際社会とも連携し、あらゆる手段を尽くして取り組む。

○全ての拉致被害者と御家族にそれぞれの苦しい年月がある。

横田家

【写真3】

めぐみさん（中央）が小学2年生のときの家族旅行（1972年）。一番楽しかった時代。

・1977年、13歳のある日の学校帰り、海辺の街の自宅近くで突然姿を消した横田めぐみさん。目撃者や遺留品もなく、家族は毎日街や海岸を歩き回って必死でめぐみさんを探した。

・20年経ち、めぐみさんが平壤で生きているという情報が入った。多くのメディアが取り上げた。

・2002年、日朝首脳会談の日、北朝鮮が示した情報は、「横田めぐみ死亡」。しかしながら、北朝鮮の説明は納得のいくものでなく、2004年に提出された「遺骨」からはめぐみさんのものとは異なるDNAが検出。

【写真4】

滋さんは2020年にご逝去され、早紀江さんは2月で90歳になった。めぐみさんの双子の弟の拓也さんと哲也さんも精力的に活動している（2004年5月）。

・その後もめぐみさんの帰国を訴えながら、父親の滋さんは2020年に逝去。母親の早紀江さんは、今年2月90歳になった。12名の政府認定未帰国拉致被害者の唯一の親世代である。めぐみさんの弟、拓也さんは家族会の代表、哲也さんは同事務局次長となり、活動を続けている。

【写真5】

高市総理と拉致被害者御家族等の面会（2025年10月）。

飯塚家

【写真6】

仲良しの友人のお別れ会を開いた八重子さん（1997年8月）。

2歳の長女と生後半年の長男・耕一郎さんに向けられた母のまなざし。

・1978年、22歳で、突然姿を消した田口八重子さん。都会で小さな子供二人を一人で働いて育てていた。長男の飯塚耕一郎さんは当時1歳。田口さんの兄の飯塚繁雄さんに引き取られた。10年経った1987年、日本人になりすました北朝鮮工作員が韓国の航空機を爆破する事件が起きた。捕まった工作員は、日本から拉致された女性に日本語教育等を受けたと証言した。後に、この女性が田口八重子さんである可能性が極めて高いと判明。

【写真7】

八重子さんの兄の繁雄さん（左）と耕一郎さん（右）（2000年代）。繁雄さんは、八重子さんが拉致された後に耕一郎さんを引き取って愛情をかけて育てた。

・飯塚耕一郎さんは21歳のとき、自分の実の母が拉致被害者であることを育ての父、繁雄さんに初めて教えられた。2002年、北朝鮮は、田口さんは交通事故で既に死亡したと主張。しかしながら、その説明は死亡を事実として確認できるものでなく、耕一郎さんは、顔を覚えていない母親との再会のため、2021年に亡くなった繁雄さんの想いも引き継いで、活動を続けている。

【写真8】

耕一郎さんは家族会事務局長を務めている（2025年12月）。

○北朝鮮による拉致問題について

・まだそう遠くない過去に、少なくとも17名の日本人が、様々な場所や手口で北朝鮮当局に拉致された。その他にも拉致の可能性が排除されない方が多数おられる（注）。

・北朝鮮は長年拉致を否定し続けていたが、一転して2002年にこれを認め、5名だけが帰国。

・北朝鮮は、他の方々について「未入境」や「死亡」と主張し、鑑定で別人のDNAが検出された「遺骨」の提供を含め、根拠の極めて不自然で納得のいかない説明をして、拉致問題が解決済みと主張し続けている。被害者は今も助けを待っている。

・日本だけの問題ではない。2014年の国連の調査委員会の報告書では、北朝鮮による拉致事案の被害者の出身国は、日本以外にも10か国に及ぶとされている。また、米国議会上下両院では、2004年に中国において北朝鮮に拉致された可能性のある米国人、デービッド・スネドン氏について、懸念表明と真相究明を求める決議が採択されている。

・国連人権理事会や国連総会においては、拉致問題を含む北朝鮮人権状況決議がコンセンサスで採択されている。

・このように、北朝鮮による拉致は、基本的人権の侵害という国際社会全体の普遍的問題である。

(注) 北朝鮮による拉致の可能性を排除できない方は871名(2026年1月時点)おり、日本政府は、情報収集や捜査・調査を続けている。

【写真9 (オンライン記事のみ)】

12名の政府認定未帰国拉致被害者。

さらに、北朝鮮によって拉致された可能性を排除できない人が多く存在している。

・拉致被害者とその御家族についてさらに知っていただくため、日本政府が制作した「北朝鮮による拉致問題を考える—日本の拉致被害者御家族の訴え—」をご覧ください。